



大学共同利用機関法人

人間文化研究機構

National Institutes for the Humanities

要覧 2006





要覧 2006

目次

機構長あいさつ	1
設立の経緯と目的	2
組織図	3
人間文化研究総合推進事業	4
連携研究	4
連携展示	5
研究資源の共有化推進	5
講演会・シンポジウム	6
知的財産	7
地域研究推進事業	7
各機関の活動	8
国立歴史民俗博物館	8
国文学研究資料館	12
国際日本文化研究センター	16
総合地球環境学研究所	20
国立民族学博物館	24
資料	28
委員会一覧	28
経営協議会／教育研究評議会／人間文化研究総合推進検討委員会／評価委員会／機構会議／	
企画連携室会議／連携研究委員会／研究資源共有化検討委員会／地域研究推進委員会	
データ一覧	30
予算・決算／職員数／共同研究の件数および共同研究者数／研究者の受け入れ・派遣／	
外部資金の受け入れ／データベース一覧／大学院教育	



大学共同利用機関法人・人間文化研究機構は、平成16年(2004)に設立された研究組織で、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所および国立民族学博物館という5つの研究機関によって構成されています。本機構は、これらの諸機関が、学問的伝統の枠を超えて連合し、自然環境をも視野に入れた人間文化の総合的研究拠点を形成し、そこから新しいパラダイムを創出することによって、自然と人間の歴史的営為が、地球規模で複雑に絡み合っ

て生じる21世紀のさまざまな難問に立ち向かおうとしています。機構は、こうした目標を達成するための事業のひとつとして、これら5つの研究機関を中核とし、国内外の大学・研究機関の研究者の参画を得て実施する「連携研究」を推進してまいります。また、機構を構成する5機関が所蔵する膨大な研究資料の利用を促進するため、これらの諸資料をデジタル化し、これをネット上の共通のプラットフォームで利用し、同時に広く情報提供する「研究資源共有化」を本格化させております。さらに、わが国の新たな地域研究推進の一翼を担うため、地域研究推進センターを設置いたしました。

機構の研究者が、それぞれの個性を保ちつつ、みずからの専門分野を超えたさまざまな研究プロジェクトに積極的に参加することによって、本機構を真に人間文化の総合的学術研究の世界的拠点として発展させるべく、今後とも努力を続ける所存であります。

平成18年7月

大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

機構長 石井米雄

設立の経緯と目的

大学共同利用機関は、学術研究の拠点として、大規模な施設設備や膨大な資料・情報などを全国の大学等の多数の研究者の利用に供するとともに、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。

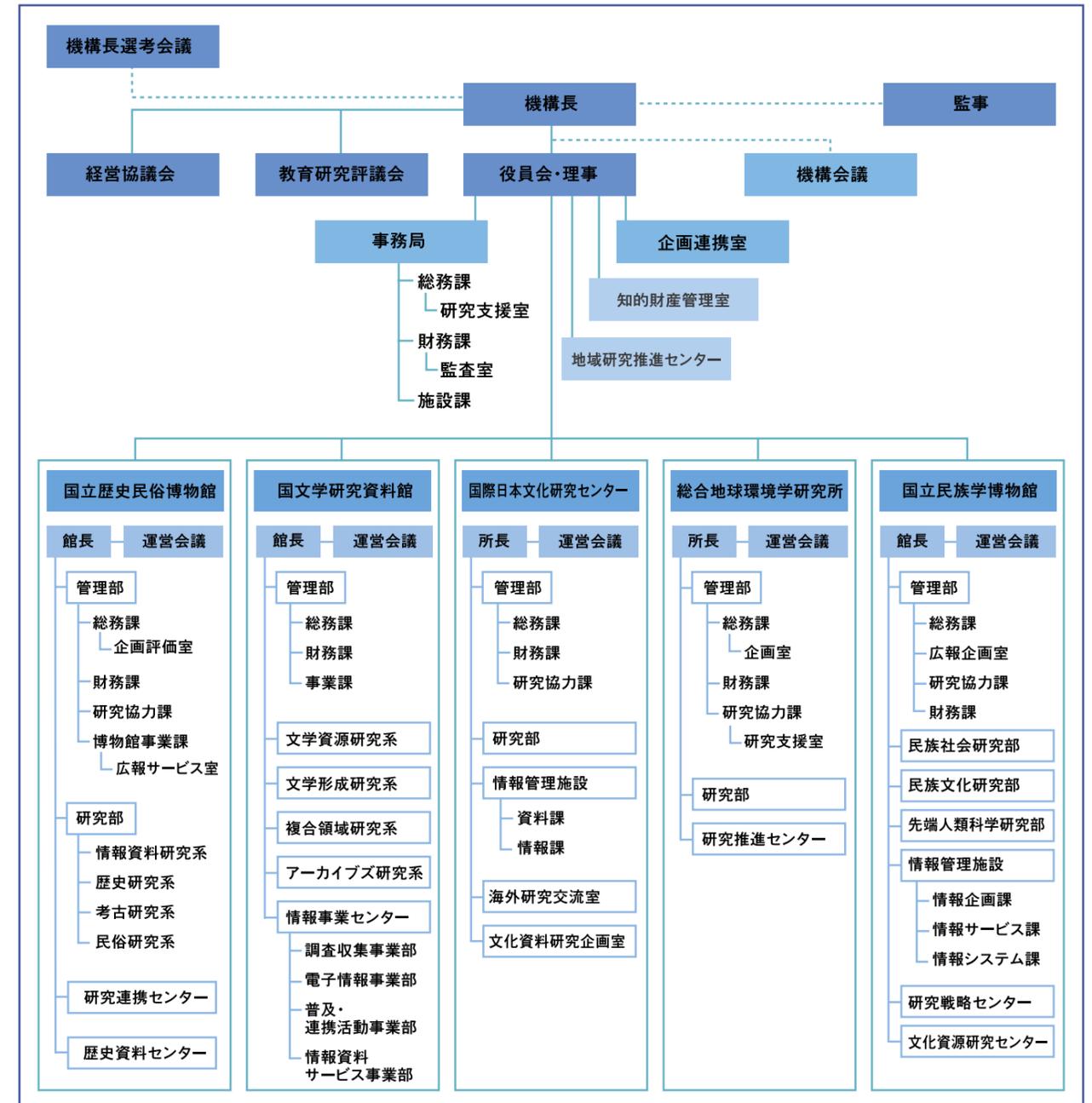
大学共同利用機関の法人化にあたっては、既存の16の研究機関が、人間文化研究機構、自然科学研究機構、高エネルギー加速器研究機構、情報・システム研究機構の4つの機関に再編されましたが、大学共同利用機関としての役割である共同利用および外部に開かれた運営は機構ごとに充分確保できるよう整備に努めました。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構は、人間文化に関わる5つの大学共同利用機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）によって構成され、平成16年（2004）4月に設立されました。

21世紀を迎えた今日、自然と人間の歴史的営為が地球規模で複雑に絡み合った難問が山積しています。それらに対応するために、自然環境をも視野に入れた人間文化に関する総合的研究をめざして、5つの研究機関が旧来の学問の枠を超えて連合し、新しいパラダイムを創出する研究拠点を形成するものです。本機構は、膨大な文化資料にもとづく実証的研究、人文・社会科学の総合化をめざす理論的研究など、時間、空間の広がり視野に入れた文化に関わる基礎的研究および自然科学との連携も含めた研究領域の開拓に努め、また、課題解決型の研究にも取り組み、文化の総合的学術研究の世界的拠点となることを目標とするものです。

機構を構成する各研究機関とその研究者は、それぞれの個性を保ちつつも、その専門分野を超えた研究プロジェクトに積極的に参加することによって、機構の創造的発展を図ります。本機構には、博物館、資料館の文化資料のナショナルセンターとしての機能を持つ研究機関が参画しています。機構を構成する各研究機関がすでに蓄積し、これからも収集に努める「資料」と「情報」にもとづき、機構内外の研究者の総力を結集して調査研究を実施し、機構全体としてその研究成果を展示、刊行物、さらにはあらゆる情報機能などを活用することにより広く国内外に発信し、学術文化の進展に寄与することをめざすものです。

組織図



機構役員

石井米雄 機構長
 長野泰彦 理事
 朝岡康二 理事
 大崎 仁 理事(非常勤)
 五味文彦 理事(非常勤)
 松澤員子 監事(非常勤)
 新保博之 監事(非常勤)

各機関の長

平川 南 国立歴史民俗博物館長
 伊井春樹 国文学研究資料館長
 片倉もとこ 国際日本文化研究センター所長
 日高敏隆 総合地球環境学研究所長
 松園万亀雄 国立民族学博物館長

企画連携室

長野泰彦 理事
 安田常雄 国立歴史民俗博物館・教授
 鈴木 淳 国文学研究資料館・副館長
 合庭 惇 国際日本文化研究センター・情報管理施設長
 秋道智彌 総合地球環境学研究所・プログラム主幹
 田村克己 国立民族学博物館・副館長

事務局

黒田英雄 事務局長
 高橋裕俊 総務課長
 長塚正明 財務課長
 篠原周史 施設課長

人間文化研究総合推進事業

21世紀における人類のもっとも重要で緊急な課題は、生存のための環境問題とともに、世界における人間の共生であることから、人間文化研究機構として従来の枠組みを超えて「人間文化研究」の新領域を創出し、先端的・国際的な研究を展開するため、次の事業を展開します。

- 人間文化研究総合推進検討委員会
人間文化に関する総合的研究推進の方向、推進すべき領域、課題およびそのための研究体制の構築等の検討
- 人間文化研究資源の共有化推進
- 機構内外機関の連携研究等の推進
- その他（国際連携協力、情報発信等）

連携研究

「21世紀における新しい人間文化研究の創出」を目的とし、機構内の複数の機関における研究を相補的に組み合わせ、かつ、高度化させるため、連携研究を推進しています。この研究は機構内外の研究者に開かれたものです。

機構を構成する5つの大学共同利用機関はそれぞれの分野における研究のナショナルセンターであり、かつ、個別の大学では扱えない大規模な研究資料群を重点的に収集・整理・調査し、それを全国の研究者の利用に供しています。各機関が培ってきた研究基盤と成果を有機的に結びつけ、さらに高次の研究に発展させるために企画されたのが連携研究です。また、この連携研究を機構外の研究者にもオープンにし、研究の実をあげるとともに、本機構の共同利用性をいっそう高めることも重要な目的です。

「日本とユーラシアとの交流に関する総合的研究」というテーマのもとに、「交流とイメージ」「人と水」「文化の往還」という3つの研究領域が設定されています。

また、機構内の機関が所蔵する有形・無形の文化資源を駆使する研究を平成18年度から開始しました。各機関はそれぞれの文化資源資料について整理・調査研究・情報提供を行ってきた豊かな実績がありますが、それらを批判的に結合させ、同時に機構外の研究者とともに研究・利用していくことにより、より高いレベルの研究成果が期待されます。「文化資源の高度活用」というタイトルのもとに、現在、本研究6課題と予備研究2課題が行われています。

これらの研究の成果は、出版や展示はもとより、電子媒体を通じて広く世界に開示し、人間文化研究の発展に資するものです。

連携展示

人間文化研究機構は、膨大な研究資料・情報を収集、調査研究、そして提供することを共同利用の形態・機能のひとつに掲げています。国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館は大規模な展示室を有し、さらに加えて、国文学研究資料館は現在は小規模な展示室ですが、立川移転後は重要文化財などの指定品も展示できるよう、本格的な展示室を設計準備中です。

共同研究をはじめとする種々の研究成果は、刊行物、情報発信、講演、フォーラムなどに加えて、可視化し、迅速に研究者に展示公開するとともに、社会との連携として広く国民一般に供覧することで共同利用機関としての実をあげていきます。

機構連携事業として、研究資源の共有化事業を推進する一方、各機関の共同研究などの成果を展示公開できる点は、本機構が他機関や大学に比して、きわめて特徴的な機能を有しているといえます。

さらに、その展示形態として、連携研究の成果を複数機関が「連携展示」することも期待されます。平成17年度は古今集、新古今集をめぐる「うたのちから」が国立歴史民俗博物館と国文学研究資料館の連携のもとに行われました。

研究資源の共有化推進

人間文化に関する多くのデータベースの構築と発信は新しい研究教育環境を生み出しました。さまざまな研究データベースを一元的に、網羅的に、かつ、迅速に活用できる情報環境を創出することは、研究教育環境をさらに大きく変革します。人間文化に関する学問の蓄積・継承・創成をめざす当機構は、国内外で発信される種々のデータベースの有効利用を促し、研究教育の促進をめざして、新しい研究領域の開拓に寄与するため、平成17年度から3年計画で研究資源共有化推進事業を重点的に実施しています。

本機構を構成する各機関は、それぞれのミッションにしがたい、多くのデータベースを構築してきました。これらは作られた時期やつくりが異なり、そのままでは一元的に利用できる状況にありません。当事業では、これらの多種多様な研究データベースを共通のプラットフォームに載せ、より有機的な利用環境を整備します。これには、(1)さまざまなデータベースから必要な情報を一元的に探し出す、高度な検索機能、(2)種々の形態で蓄積されている研究資源の電子化と発信を行う機能、(3)検索された情報を加工ないし統計処理を行うなど、研究資源を研究に活用するための研究支援機能、が含まれます。また、これと平行して、既存コンテンツの高度化と有機的連携を行います。

このような機能を備えた情報環境が実現することによって、研究資源の共有化が可能になるだけでなく、分野を超えた連携研究や共同研究をより一層活性化させることができます。このことにより、大学共同利用機関としての当機構がその役割を十全に果たすことができると確信します。さらに、この試みを国内外に拡げてゆくことを通じて、世界の人間文化研究の発展に貢献することを、当機構は目標としています。

平成18年度 実施調達

平成19年度 運用検証調達／運用ハードウェア調達

平成20年度 運用開始

講演会・シンポジウム

人間文化研究機構では、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館という専門を異にする5つの研究機関が結ばれたメリットを生かし、より新しく、より幅の広い人文科学の創出をめざすとともに、さまざまな研究活動を展開しています。これによって得られた学問的成果を広く知っていただくために、定期的に公開講演会・シンポジウムを開催します。



第3回シンポジウムポスター



第4回シンポジウムポスター



広報誌『人間文化』Vol.1



広報誌『人間文化』Vol.2



広報誌『人間文化』Vol.3

人間文化研究機構設立記念公開講演会・シンポジウム

「今なぜ、人間文化か」
平成16年9月25日(土)
一橋記念講堂

人間文化研究機構第2回公開講演会・シンポジウム

「歩く人文学——人文学と社会の新しい関係」
平成17年6月25日(土)
大阪国際会議場

人間文化研究機構第3回公開講演会・シンポジウム

「人が創った植物たち」
平成17年10月6日(木)
有楽町朝日ホール

人間文化研究機構第4回公開講演会・シンポジウム

「人はなぜ花を愛でるのか？」
平成18年5月27日(土)
国立京都国際会館

人間文化研究機構第5回公開講演会・シンポジウム(予定)

「明治の手紙」(仮題)
平成18年9月30日(土)
一橋記念講堂

知的財産

人間文化研究機構は文部科学省が行う「大学知的財産本部整備事業」に他の大学共同利用機関法人とともに参加して、機構における知的財産の創出・取得・活用を戦略的に実施しています。そのために、機構を構成する各機関では、研究・教育の過程において創出・蓄積された知的財産を効率よく管理・運用するだけでなく、積極的な社会還元を行うための体制を整えてきました。知的財産管理室はこのような体制整備を推進するとともに、知的財産の権利についての周知に努めています。

また、人間文化研究機構では各機関から数多くのデータベースがインターネットなどを通じて公開されていますが、データベースの権利保護が重要課題となっている現在、知的財産権のうちでもデータベース保護に関わる著作権の取り扱いにとくに留意しています。

平成17年度事業

- (1) 「人間文化研究機構知的財産セミナー」の開催
「映像作品と権利処理」「デジタル時代の著作権流通技術——デジタル著作権とデジタル権利管理」をテーマとして機構内各機関の研究者等を対象にセミナーを2回開催しました。
- (2) イノベーション・ジャパン 2005 への参加
国内大学の最先端技術シーズと産業界のマッチングイベントであるイノベーション・ジャパン 2005 において、大学共同利用機関知的財産本部整備事業が出展するブースに参加しました。
- (3) データベース台帳の公開
人間文化研究機構が保有するデータベースの台帳をホームページで公開しました。

平成18年度事業(予定)

- (1) 「人間文化研究機構知的財産セミナー」の開催
主として「著作権」をテーマとしてセミナー開催。

人間文化研究機構では、平成18年度から新たに、特定重要地域の文化、社会などの現状と課題を総合的に理解し、解明するため、関係大学・機関と協力して、研究拠点および研究ネットワークの形成を進める「地域研究推進事業」を開始しました。

対象地域の選定と研究計画の策定

学識経験者で構成する地域研究推進委員会を設け、研究推進対象地域としてイスラーム地域と現代中国を選定するとともに、それぞれの地域の研究基本計画の策定を進め、イスラーム地域については、すでに計画を策定しました。

イスラーム地域研究の推進

イスラーム地域研究の研究拠点を、機構と関係大学等が共同して次のとおり設置するとともに、早稲田大学に設置する「現代イスラーム地域研究センター」を中心に、研究の総合的推進と研究ネットワークの形成を進めます。

- * 早稲田大学イスラーム地域研究所「現代イスラーム地域研究センター」の共同設置
- * 東京大学次世代人文学開発センター「イスラーム地域研究部門」の共同設置
- * 上智大学アジア文化研究所「イスラーム地域研究セクション」の共同設置
- * 東洋文庫「イスラーム地域研究史・資料センター」の共同設置



国立歴史民俗博物館全景

概要

国立歴史民俗博物館（歴博）は、大学における学術研究の発展および資料の公開等、一般公衆に対する教育活動の推進に資するための大学共同利用機関として、昭和56年（1981）に設置されました。

歴博は、歴史・考古・民俗および情報資料の4研究系による学際的・総合的な協業にもとづいて創設以来収集してきた膨大な学術資料・情報と先端的科学機器を十分に活用し、新たな日本の歴史と文化像を築くことをめざしております。全国の大学、研究所等の研究者の参画を得て、専門を異にする複数の研究者が共通の研究課題のもとにプロジェクトを組織し、共同研究（基幹研究・基盤研究・個別共同研究）を実施しています。このほか、歴博に所属する研究者がそれぞれ独自の専門領域についての研究活動を行っております。

これらの研究成果については、『国立歴史民俗博物館研究報告』として刊行するとともに、企画展示をはじめ、「歴博講演会」「歴博フォーラム」さらには情報データベースなどを通して広く公開しています。

以上のような学術資料・情報の収集、整理、保存、調査研究そして提供（展示、出版、情報データベースなど）の一連の機能は、歴博が大学をはじめとする研究者のための共同利用機関として、果たすべき重要な使命であると考えています。

その機能のうちでも展示は、歴博にとってきわめて意義ある事業のひとつです。開館以来20年を経たいま、現状の総合展示は研究成果の反映、国際化および一般市民の知的需要への対応が不足しているとの批判が利用者から寄せられています。このような急激に変化する現代社会の要請に応えるためには、最新の研究成果を反映した総合展示の見直しが不可欠であり、新たに総合展示の全面的な再構築を実現する必要があります。平成19年度末から一新した総合展示の一部を順次公開する予定です。

研究

歴博における研究活動は、歴史学・考古学・民俗学およびこれらに関連する学問分野との学際的協業を通して、現代的視点に立ち、世界史的視野から確固とした方法論に立脚した新しい日本の歴史と文化の実証的研究を推進することを目的としており、そのために全国の大学をはじめとする研究者とともに共同研究プロジェクトを組織しています。

研究の枠組みは、日本の歴史と文化について、大きな研究課題のもとに、歴史学・考古学・民俗学および関連諸学との学際的研究をめざす「基幹研究」、本館所蔵資料の研究および情報化を図り、歴史学・考古学・民俗学などの新しい方法論的な基盤をつくる「基盤研究」、歴史学・考古学・民俗学および自然科学の固有の課題について研究する「個別共同研究」があります。

それぞれの平成18年度における研究テーマは次の通りです。

基幹研究

- ・ 神仏と生死に関する通史的研究
- ・ 20世紀に関する総合的研究
- ・ 生業・権力と知の体系に関する歴史的研究
- ・ 交流と文化変容に関する史的研究

基盤研究

- ・ 資料の科学的調査および総合的年代研究
- ・ 資料の高度歴史情報化と資料学的総合研究
- ・ 博物館学的総合研究

個別共同研究

- ・ 水木コレクションの形成過程とその史的意義
- ・ マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究
- ・ 東アジアにおける多様な自然利用——水田農耕民と焼畑農耕民
- ・ 日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究
- ・ 愛媛県上黒岩遺跡の研究
- ・ 日本歴史における水田環境の存在意義に関する総合的研究
- ・ 人文・自然景観の開発・保全と文化資源化に関する研究
- ・ 身体と人格をめぐる言説と実践



個別共同研究「マロ塚古墳出土品を中心とした古墳時代中期武器武具の研究」資料調査風景

共同利用

1. 資料収集等

歴博では、実物資料・複製資料・音響映像資料およびこれに関連する資料を計画的・継続的に収集しており、平成18年5月現在、210,898点（うち国宝5点、重要文化財83点、重要美術品27点）収蔵しています。また、蔵書冊数は275,747冊となっています。

2. 情報提供

研究報告書の刊行

共同研究などの成果は『国立歴史民俗博物館研究報告』として刊行するとともに、研究情報を網羅した『国立歴史民俗博物館年報』、さらに広報誌『歴博』『展示図録』『資料目録』などを刊行しています。

データベースの公開

収蔵資料を広く公開し、研究利用に資することを目的とした館蔵資料データベース（6本）と諸分野の文献目録や共同研究の成果を集めたデータベース（19本）、記録類の全文データベース（8本）を主として研究者に提供しています。

資料閲覧

研究者を対象とした資料閲覧（熟覧）の他に、平成16年7月から近世・近代9文書の実物またはマイクロフィルムと館蔵51資料のマイクロフィルム紙焼製本（部分）の即日閲覧を実施しています。



資料調査風景



資料調査風景

3. 展示

総合展示

歴博の総合展示は、日本人の生活史に重点を置いて構成し、5つの展示室に分かれています。第1展示室から第3展示室は、原始・古代から中世を経て近世に至る歴史を時代順に配置し、第4展示室では日本人の民俗世界を、第5展示室では近現代のテーマを配置しています。これらのテーマは、それぞれ館内外の研究者によるプロジェクト研究を基礎にしています。また最新の研究動向を踏まえ、その研究成果を展示に反映する総合展示のリニューアルを進めており、第3展示室はリニューアル工事のため、平成20年3月まで閉室しています。



総合展示室



「東アジア中世海道——海商・港・沈没船」展

企画展示・特別企画

共同研究プロジェクトの成果を公表する方法のひとつとして、企画展示・特別企画などがあり、平成18年度は5回の開催を予定しています。

- ・日本の神々と祭り——神社とは何か？
平成18年3月21日～5月7日
- ・佐倉連隊にみる戦争の時代
平成18年7月4日～9月3日
- ・歴史のなかの鉄炮伝来——種子島から戊辰戦争まで
平成18年10月3日～11月26日
- ・新収資料の公開／日本の建築
平成19年1月10日～2月12日
- ・都市図を読む（仮称）
平成19年3月27日～5月6日

なお、平成7年に開設された「くらしの植物苑」では、生活文化を支えてきた植物を系統的に植栽し、素材となった植物を博物館の展示資料と関連づけて深く理解できるようにしています。



「日本の神々と祭り」展

社会連携

歴博では、共同研究などの成果を展示という形だけでなく、さまざまな普及活動を通じて社会に還元しています。

1. 歴博フォーラム・講演会の開催

研究成果を広く一般に公開するための「歴博フォーラム」と「歴博講演会」を開催しています。



研究会風景

2. れきはくプロムナード

平成16年9月に、歴博における最新の研究成果の速報および地域社会との連携、ならびに人間文化研究機構の紹介などを目的とした「れきはくプロムナード」を開設し、各種の展示を行っています。



れきはくプロムナード

3. 専門職員研修事業などの実施

平成5年度から、歴史民俗系資料館の活動の充実に資するため、文化庁と共催で全国の歴史民俗系博物館・資料館の専門職員を対象に「歴史民俗資料館等専門職員研修会」を開催しています。

4. 歴博の紹介

全国生涯学習フェスティバルや国立少年自然の家などでの歴博紹介を積極的に実施しています。

5. 研究交流

海外の大学・研究機関・博物館と学術交流をめざし、平成17年度までに5件の交流協定を締結しています。また、国際研究集会を開催するとともに、外国の研究者や国内の大学などの研究者に研究の機会を提供するため、外国人研究員、外来研究員を受け入れています。

国内の活動としては、各地の研究者との研究交流を深めるための研究集会を開催しています。

大学院教育

大学院教育

平成11年度から総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻が置かれています。個別授業・基礎演習・集中講義の3つの形態の授業を行い、博士論文の作成指導と研究者としての能力の育成を図り、歴史学・民俗学・考古学・分析科学などの多分野にわたる研究者による複数教員の指導と、基盤機関に所蔵されている実物資料の活用などを通して、広い視野を持った創造性豊かな研究者の育成を行っています（平成18年5月1日現在、在学生29名）。

特別共同利用研究員

大学院教育の協力の一環として、特別共同利用研究員制度を平成9年度から設けており、大学の要請に応じ歴史学・考古学・民俗学およびそれに関連する分野を専攻する大学院学生を受け入れ、必要な指導を行っています（平成17年度実績4名）。



国文学研究資料館 本館池側から

概要

国文学研究資料館(国文研)は、文献資料の調査研究、収集、整理および保存等を目的として、昭和47年(1972)に設置されました。以来、国内外に所在する日本文学およびその周辺の資料について調査し、マイクロフィルム等による収集を行い、保存に努めています。また、集積した資料や情報は、閲覧、複写サービス、インターネット等によるサービスを通じ、広く研究者および一般利用者に提供しています。

同時に、調査、収集した膨大な書誌情報を活用し、文学研究を共同利用の観点から体系的、総合的に展開させるべく基幹研究、プロジェクト研究を企画し、推進しています。それらの多くは、大学等の研究者と連携し、多面的な共同研究として実施しています。また、海外の研究機関、研究者との交流にも積極的に取り組んでいます。

その他、展示、講演会、アーカイブズ・カレッジ、古典籍講習会等を通じて、日本文学およびその周辺の文化資源の活用、社会との連携を図っています。

研究

国文学研究資料館では4つの研究系でプロジェクト研究(共同研究を含む)を行うほか、平成18年度から新たに全館

的に取り組む基幹研究を開始しました。

基幹研究

創立以来当館が培ってきた、日本文学に関する原本資料の調査収集の成果を基盤として継承し、体系的な調査収集計画にもとづいて行う総合研究で、「文学資源の総合研究」という研究テーマのもとに以下の2研究課題を開始しました。

- ・ 王朝文学の流布と継承
- ・ 19世紀の出版と流通

文学資源研究系

書籍形態の文学資源に関し、原本調査に基づいた総合研究を行います。書誌情報の集積と分析、書籍の形態の内容の考察、目録の作成、解題の作成などの基礎研究を通して、文学資源が有する日本文学としての資料的特質を明らかにします。

- ・ 日本古典籍特定コレクションの目録化の研究(共同研究)
- ・ 和刻本(五山版・近世初期刊本)の研究
- ・ 学芸書としての中世類題集の研究(共同研究)
- ・ 近世後期小説の様式的把握のための基礎研究(共同研究)

文学形成研究系

日本文学の個々の作品や作品群を対象に、作品形成という観点を軸として、本文の調査によって作品の成立、表現、享受等に至るさまざまな問題を総合的に研究し、日本文学の作品的特質を明らかにします。

- ・ 平安文学における場面生成研究(共同研究)
- ・ 古典形成の基盤としての中世資料の研究
- ・ 近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究(共同研究)
- ・ 本文共有化の研究

複合領域研究系

文学作品群の多角的な分析を行うことによって学際的な研究領域の開拓をめざすとともに、そうした研究を一体となつて支える、文化資源情報の電子化および共有化に関する研究を行います。

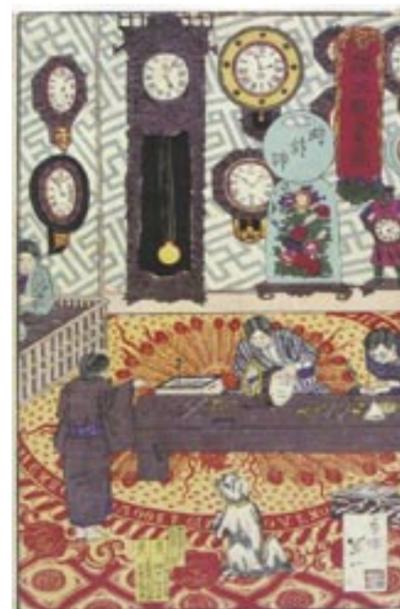
- ・ 開化期戯作の社会史研究(共同研究)
- ・ 文化情報資源の共有化システムに関する研究(共同研究)

アーカイブズ研究系

古文書から電子記録まで多様に存在するアーカイブズ資源に関する総合的研究を行い、わが国のアーカイブズの特質の解明およびその保存、活用のための技法・理論を確立することを目的とし、さらにアーカイブズ情報を社会化するためのシステム研究を推進します。

- ・ 経営と文化に関するアーカイブズ研究(共同研究)
- ・ 東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究(共同研究)
- ・ アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究(共同研究)

このほか、公募による共同研究「江戸時代中期文人大名に見る学芸と思想に関する総合的研究」および「川瀬一馬氏旧蔵古典籍写真資料の調査と研究」、招聘外国人研究員による共同研究「井原西鶴と中世文学」を実施します。



「明治開化期の錦絵」から



古典籍のさまざま



奈良絵本「小おとこ」から



「鳥追阿松海上新話」から

共同利用

1. 資料閲覧サービス

日本文学およびその周辺の専門図書、雑誌、原本類の体系的な収集に努めています。収集し整理した資料は閲覧室において来館利用者への閲覧・複写サービス等を行っており、図書館間の相互利用制度により、遠隔地の利用者へも資料の複写等のサービスを行っています。

2. 公開データベース等

「国文学論文目録データベース」「古典籍総合目録データベース」をはじめ、計21のデータベースによる学術情報の提供を行っています。さらに、「リプリント日本近代文学」のオンデマンド出版も昨年度から開始しました。

3. 展示

春季特別展

・「みたて」と「やつし」—— 浮世絵・歌舞伎・文芸

平成18年5月10日～6月1日

文学・絵画・演劇などさまざまな分野で日本人がとってきた表現技法「みたて」「やつし」。「みたて」はひとつのものを別のものにぞらえることで、「やつし」は昔の権威あるものを現代風に卑近にして表すことです。今回の展示とシンポジウムでは、江戸時代の文学をはじめ浮世絵や歌舞伎に至るまで、さまざまな分野で見られる「みたて」と「やつし」を館蔵資料を中心に紹介します。



「怪談深閨屏」(「リプリント日本近代文学」から)



「擬五行尽之内」(春季特別展「みたて」と「やつし」から)

秋季特別展

・仮名垣魯文百覧会

平成18年10月17日～11月2日

幕末から明治前期にかけての仮名垣魯文の著述を通覧し、転換期を生きた戯作者とその文業の可能性を探ります。

4. アーカイブズ・カレッジ

記録史料の保存と利用サービス等の業務を担う専門職員(いわゆるアーキビスト)の養成のため、長期コースと短期コースを開催します。講師は当館教員等で、長期コースは7月～9月の間の計8週間、国文学研究資料館で開催し、平成18年度の短期コースは岡山大の後援、岡山県立記録資料館等の協力により、岡山衛生会館において11月13日～24日に開催を予定しています。



アーカイブズ・カレッジ

5. 日本古典籍講習会

国内外で日本の古典籍を扱っている図書館や文庫の司書および研究者を対象とし、古典籍の基礎知識・取り扱い等に関する講習会を開催します。講師は、当館教員および司書ならびに国立国会図書館司書等で、平成18年度は平成19年1月に国立国会図書館において開催を予定しています。

社会連携

1. 国際日本文学研究集会

国内外の日本文学研究者の交流を深め、日本文学研究の

発展を図るため、毎年11月に開催しており、平成18年度は11月9日、10日に「表象と表現」というテーマで開催します。



国際日本文学研究集会

2. 子ども見学デー

文部科学省の働きかけにより実施している「子ども見学デー」の一環として、平成18年度は8月22日に開催します。平成17年度は「目でみるおはなし——いろいろな絵」「むかしの文字をよんでみよう」と題した講義を行いました。



「子ども見学デー」(平成17年度)

3. シンポジウム

・表現としての「やつし」と「みたて」

平成18年5月17日開催

国文学研究資料館文学形成研究系「近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究」プロジェクトの研究成果です。浮世絵、演劇資料、文芸の諸方面にわたって、「ヤツシの源流を探る」「戯作の見立て」「浮世絵にみる見立て」といった視点から、〈見立て・やつし〉という日本文化に特異な表

現について追求しました。



シンポジウム「表現としての『やつし』と『みたて』」

4. 連続講演

日本文学に関心を持つ一般市民・学生を対象に、平成18年度は「王朝物語山脈の眺望」というテーマで、以下の日程で開催します。9月25日、10月2日、16日、30日、11月13日、各日とも15:00～。

大学院教育

国文学研究資料館には、総合研究大学院大学の文化科学研究科(日本文学研究専攻)が設置されています。日本文学研究専攻では、従来の日本文学研究を、文化科学の視点から総合的にとらえ直す立場から、多面的な研究指導を実施しています。

また、特別共同利用研究員制度により、大学の要請に応じ大学院生を受け入れ、研究指導に協力しています。



国際日本文化研究センター外観

概要

国際日本文化研究センター（日文研）は、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究と世界の日本研究者に対する研究協力・支援を行うことを目的として、昭和62年（1987）に設置されました。以来、日本文化の独自性の研究のみならず、諸外国との文化比較や文化交流の視点をも重視し、日本文化に関する多様な研究を、国内外から参加するさまざまな専門領域の共同研究員によって学術横断的に展開しています。

研究部門制を採用していない日文研では、共同研究を研究域・研究軸という枠組みのもとに位置づけ、特定の分野に偏らない、バランスのとれた共同研究を推進しています。その研究成果は、和文・英文による図書・学術雑誌、講演会、シンポジウムなどさまざまな形で、国内のみならず広く国際社会に提供しています。

研究協力としては、世界各地の日本文化の研究者・研究機関に、研究情報を発信するとともに、地域の実情に応じて日文研のスタッフを派遣して研究会を開催するなど、多面的な研究協力・活動を行っています。

また、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻・博士課程では、次代の日本研究者養成を行っています。ここでは、留学生も受け入れています。

研究

日文研における研究活動は、研究域・研究軸という枠組みのもとに行われています。この枠組みの原則は、日本文化の全体像を把握するための視座として、まず研究域を設け、次にそれらを分節して研究軸を設けたものであり、研究軸は研究域の示す視座の中で、いくつかの方向を特定するものです。

超時系列的な研究 Supra-chronological research	時系列的な研究 Chronological research	一単位としての日本文化 Japanese culture as an independent unit					
構造研究 (第2研究域) The Structures of Culture (Second research sphere) <table border="1"> <tr><td>自然 Nature</td></tr> <tr><td>人間 Man</td></tr> <tr><td>社会 Society</td></tr> </table>	自然 Nature		人間 Man	社会 Society	動態研究 (第1研究域) Cultural Dynamics (First research sphere) <table border="1"> <tr><td>現代 Contemporary</td></tr> <tr><td>伝統 Traditional</td></tr> <tr><td>基層 Prehistoric</td></tr> </table>	現代 Contemporary	伝統 Traditional
自然 Nature							
人間 Man							
社会 Society							
現代 Contemporary							
伝統 Traditional							
基層 Prehistoric							
文化比較 (第3研究域) Comparison of Cultures (Third research sphere)	文化関係 (第4研究域) Cultural Relations (Fourth research sphere)	世界中の日本文化 Japanese culture in relation to the world					
<table border="1"> <tr><td>生活 Daily life</td></tr> <tr><td>制度 Institutions</td></tr> <tr><td>思想 Thought</td></tr> </table>	生活 Daily life		制度 Institutions	思想 Thought	<table border="1"> <tr><td>旧交圏 I Ancient sphere of contact</td></tr> <tr><td>旧交圏 II Early modern sphere of contact</td></tr> <tr><td>新交圏 Modern sphere of contact</td></tr> </table>	旧交圏 I Ancient sphere of contact	旧交圏 II Early modern sphere of contact
生活 Daily life							
制度 Institutions							
思想 Thought							
旧交圏 I Ancient sphere of contact							
旧交圏 II Early modern sphere of contact							
新交圏 Modern sphere of contact							
文化情報 (第5研究域) Cultural Information (Fifth research sphere)							
<table border="1"> <tr><td>外国における日本研究 I Japanese studies abroad I</td></tr> <tr><td>外国における日本研究 II Japanese studies abroad II</td></tr> <tr><td>日本における日本研究 Japanese studies in Japan</td></tr> </table>		外国における日本研究 I Japanese studies abroad I	外国における日本研究 II Japanese studies abroad II	日本における日本研究 Japanese studies in Japan			
外国における日本研究 I Japanese studies abroad I							
外国における日本研究 II Japanese studies abroad II							
日本における日本研究 Japanese studies in Japan							

共同研究

日文研がもっとも力を入れているのは、共同研究方式の日本文化の研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。併せて専門分野の枠組みを越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役

割を果たすものと期待されます。また、共同研究では、日本と異なる知的伝統に立つ海外の研究者との交流をも重視しています。さらに、国際化時代といわれる今日、日本文化研究の国際化を図ることで、時代の要請に応えようとするものです。

このように、日文研における共同研究は、単なる研究成果の交流にとどまるものではなく、専門分野および知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有し合うことによって生み出される創造性に基づく成果を目指しています。

平成18年度は、15の課題による共同研究が行われています。



共同研究会 (千田班)

共同利用

1. 研究協力

日文研では、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究を行い、世界に開かれた国際的なセンターとしての責務を果たすため、諸外国から外国人研究者を受け入れ、これら日本研究を行っている研究者を対象に研究協力活動を展開しております。この活動は、個々の研究者の研究交流を目的とする国際研究協力と、日文研が蓄積してきた研究情報の提供に大別することができます。

具体的には、「フォーラム」「セミナー」「レクチャー」「シンポジウム」のような、研究会形式の研究交流を行う場を提供したり、個人的な研究上の協力として研究相談などを実施したりしています。また、外部からの研究助成金などを利用して、一定期間日文研で研究する国内外の研究者には、その研究目的に応じた研究の場を提供しています。

「日文研フォーラム」は、来日中の外国人研究者による研究発表と交流の場の提供を目的に、毎月開催しています。テーマは日本文化に関連したものを1回で完結する形をとっています。

「セミナー」「レクチャー」「シンポジウム」は、日文研の教員が専門領域のテーマを設定して開催するものと、来日中の外国人研究者と、日文研の教員が共同・協力して学際的なテーマを設定して開催し研究者との交流をも目的としているセミナーです。

Nichibunken Evening Seminar は、外国人研究者の研究発表と国際交流を兼ねた英語によるセミナーです。

これら外国人研究者と日文研の教員や国内研究員との親密な学際的交流は、世界の日本研究促進の基盤となっております。



木曜セミナー

2. 海外における日本研究集会

平成11年度から、海外研究交流室を中心に教員を年数回海外に派遣し、訪問した地域の日本研究者と協力して、現地の研究動向に即したテーマで小規模な研究会を開催しています。併せて、研究相談等支援業務を行っています。このことにより、日文研の設置目的である国際研究協力活動をより積極的かつ効果的に行うものです。

同時に優秀な若手研究者の発掘にもつながり、また、海外の日本研究の生の情報を得る貴重な機会になっています。平成17年は、ウイーン大学（オーストリア）とアテネ大学（ギリシャ）にて開催しました。

3. 国際研究集会

日本の文化、社会に対する世界各国の関心はますます高まり、海外における日本研究者の数も急激に増加しています。それとともに、研究者の問題意識、研究方法の多様化もきわめて著しいものがあります。このような状況に対応するため、主として日文研での共同研究をテーマに、昭和63年から国際研究集会を開催し、日本研究発展のための国際的な討論の場を設けています。

平成6年には「日本研究・京都会議」を開催し、国内外の日本研究者が一堂に会し、活発な議論が交わされ、日本研究のネットワークの形成に寄与しました。また、各研究集会の間中には、普及活動の一環として公開講演会を実施しています。

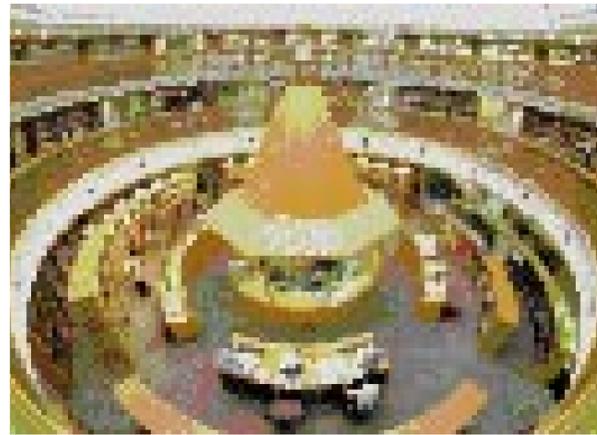


香港での国際シンポジウム

4. 図書館

中央に東屋風のサービスカウンターを配置した円形図書館は、3層の吹き抜け構造になっており、落ち着いた利用空間を提供しています。ここには、日本研究に必要な各種資料を幅広く収集し、研究者の利用に供するとともに、さまざまな情報提供につとめております。現在、6万冊の図書が配架され、利用者は自由に手にとって閲覧することができます。

また、平成7年に増設した資料館には、35万冊収容可能な固定書架・電動集密書架のほか、貴重図書室、地図資料室、研究用個室、マイクロ資料室等が配置されています。個々の資料の配架場所・貸し出し状況は各フロアー設置の検索用端末機で調べることができます。



図書館

5. 資料の収集

日文研における資料収集方針は、外国語で書かれた日本研究図書および訳書の網羅的収集、日本研究に必要な基本図書・雑誌の収集、日本研究に関する文献目録等の網羅的収集、その他、幕末明治期のガラス写真・色彩写真、古地図、ビデオ・CDなどの映像音響資料、科学史関連資料、医学史関連資料、日中関係資料等も積極的に収集しております。

6. 資料の利用

教職員・学生等は所蔵する資料を自由に利用することができます。また、外部の方も学術研究・調査を目的に事前申請のうえ閲覧することができます。これらは、インターネット上で検索でき、図書館間相互利用制度により文献複写や現物貸借サービスを申し込むことができます。



所蔵資料



出版物

社会連携

「社会に開かれた研究機関」として、研究活動・研究協力活動により得られた成果を広く社会に還元するため、以下のような普及活動を行っております。

1. 学術講演会

年3~4回、日文研講堂において、日文研の教員・外国人研究員による研究成果の発表と日本研究の普及を目的として学術講演会を開催しています。



学術講演会

2. 東京講演会

毎年6月に、東京において日本研究の普及を目的に、総合テーマ「日本文化を考える」と題して日文研の教員・外国人研究員による講演会を開催しています。

3. 公開講演会

日文研で開催される国際研究集会・国際シンポジウムの期間中に、普及活動・社会貢献の一環として同時通訳による公開講演会を開催しています。

4. 一般公開

毎年11月頃に、教員の案内による図書館・セミナー室・教員研究室・共同研究室等を公開し日頃の活動状況を紹介したり、日文研講堂において日文研の教員・外国人研究員による講演会を開催しています。ここでは、展示コーナーを設けて研究資料データベースの紹介や日文研所蔵の貴重図書・写真、前年度の教員の出版物等を展示しています。



伝統芸能プロジェクトの講演

大学院教育

日文研には、大学共同利用機関を基盤機関とし、学部を置かずに大学院だけを置く国立大学法人として総合研究大学院大学の文化科学研究科として、「国際日本研究専攻」が設置されています。この「国際日本研究専攻」では、国際的視野からの学際的、総合的な日本研究を推進する教育と研究を行っています。

また、特別共同利用研究員を受け入れ、他大学の要請に応じて大学院教育に協力しています。



大学院授業



総合地球環境学研究所全景

概要

私たち人間は今日、地球温暖化、生物多様性の喪失、水資源の渇渇など多くの地球環境問題に直面しています。平成13年(2001)に設置された総合地球環境学研究所(地球研)では、基本認識として、これらの原因が人間の文化の問題であることに着目、その解決には従来の科学技術的方法や技術手段の拡大だけでは対処しきれず、自然・技術系と人文・社会系との総合的な取り組みが必要と考えています。

こうした趣旨のもと、地球研では「地球環境学に関する総合的研究」を行うことを目的としています。地球環境問題の本質把握に不可欠な「人間と自然の相互作用環」の解明や、問題の克服につながる「未来可能性」を実現する道筋の探求などに関する研究に取り組み、また、これらの研究の成果を広く発信することによって、地球環境問題の根本的な解決に資する学問基盤を形成することをめざしています。

研究

地球研では、地球環境問題の解決に資する学問の構築に向けて、多様な研究プロジェクトを推進しています。研究は段階的に進められます。まず、一般公募により所内審査を



ルサカの近郊農村(ザンビア)



琵琶湖周辺の田んぼの濁水調査風景

経て採択された萌芽的な一般研究を半年ないしは1年実施します。そののちに所内審査を経て採択されたものが1年程度の予備研究に進むことができます。さらに国内外の外部評価委員からなる委員会の評価を経て5年程度の本研究に取り組むことができます。本研究2年終了時には同じく外部委員による中間評価があり、研究の継続の可否が審議されます。研究終了時には事後評価の対象となります。

平成18年4月現在、14件の本研究、7件の予備研究が実施されています。個々の研究プロジェクトは、常勤の教員をリーダーとし、所内外の研究機関等に属するコアメンバーと十数名から数十名規模の共同研究者から構成されています。

研究プロジェクトでは、自然と人間の相互作用環に関わるさまざまなテーマや仮説を現地調査、観測と実験、文献研究、モデル構築などを通じて明らかにする研究活動を推進しています。平成18年度末に終了する5つの本研究では、水資源変動のメカニズムの統合的解明、気候変動に対する人間の農業活動における適応過程や対応のオプション、水の利用と配分をめぐる階層化された問題群の提示、人間が生態系の多様性に与えた影響評価と伝統的な自然利用の未来可能性、地球規模における水資源の偏在と配分の問題から見た未来予測性など、水と人間社会の未来可能性につながる研究を主要課題として進めてきました。さらに、現在進行中の研究プロジェクトでは、栽培化、資源管理と保全、開発史、循環と共生などに関わるテーマ群を日本、ロシア、中国、東南アジア諸国、インド、チベットなどユーラシア大陸各地において系統的に追求しています。

以上の研究プロジェクトを進めるなかで、積極的に国際シンポジウムや研究会の場で研究成果を公表するとともに、研究の基盤となる各種の研究会、セミナー、談話会などを所内で日常的に進めています。地球環境学に関する所全体の成果は、「地球研フォーラム」として毎年、社会に発信するとともに(平成18年度は第5回目)、平成17年度に実施した2回の国際プレ・シンポジウムを経て、平成18年度秋に開催の第1回国際シンポジウムとして世界に広く発信する計画です。



和歌山県における研究集会

共同利用

共同利用研としての地球研には3つの特色があり、これらがあいまって他の共同利用機関にはない特色になっています。

1. 頭脳の共同利用

地球研では現在14件の本研究プロジェクトを推進しており、総勢1,000名を超える共同研究者が随時、研究に参加しています。地球研のプロジェクトが、「広い意味での人間文化としての地球環境問題を考える」という基本方針にそって進められていることに照らし、共同研究者の専門分野は自然系から人文社会系までの広い分野に及んでいます。また所属についても、大学や独立行政法人格を持つ研究所だけでなく、自治体や民間研究機関の専門家をも含んでいます。

2. 調査フィールドの共同利用

地球研のプロジェクトが調査対象地として選定したフィールドは国内はもとよりユーラシアを中心として30地点を超えますが、それらの多くの地域では現地研究者と地球研プロジェクトの研究者が、共同で、しかも継続的に調査研究にあたっています。これらのフィールドは機関対機関で交わされた研究協定(MOA、MOU)に基づき、当事国に設置されたもので、その当事国による学術的な認知を受けているほか、当事国の若手研究者の育成と2国間の学術交流につながるなどの副次的効果を果たしています。

3. 高精度の分析機器の共同利用

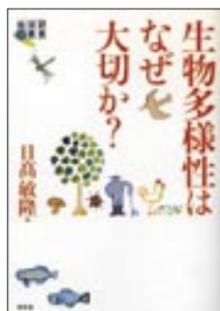
地球環境問題の本質を理解するための有効な研究手法として、質量分析、安定同位体分析（産地や年代などの同定）、DNA分析（種や品種の詳細な決定など）があります。地球研ではこれらの分析を行うため、高精度を持つ最新鋭の設備を新規に導入し、新たな分析法を開発し、またそれを広く研究者の利用に供することにより共同利用を促進しています。



砂漠車と遺跡

2. 地球研叢書

地球研の研究や成果の意味を学問的にわかりやすく紹介する出版物です。一般書店で販売しています。これまで、地球研フォーラムや国際シンポジウムの成果を元にして、日高敏隆編『生物多様性はなぜ大切か？』（平成17年4月）、『中国の環境政策 生態移民』（平成17年7月）、『シルクロードの水と緑はどこへ消えたか？』（平成18年3月）を刊行しています。



地球研叢書『生物多様性はなぜ大切か？』



地球研叢書『中国の環境政策 生態移民』



地球研叢書『シルクロードの水と緑はどこへ消えたか？』



地球研市民セミナー

4. 地球研地域セミナー

地球研のある京都から全国各地に出かけ、自治体などとの共催で公開講演会を催しています。平成17年度は富山市で「雪と人」に関するセミナーを催しました。平成18年度は秋に鹿児島市で開催を予定しています。



地球研地域セミナー

第一に、特別共同利用研究員を受け入れ、研究指導を実施しています（平成17年度の実績は2名）。とくに、環境関連の分析科学や人類学、社会学、生態学、地理学、生命体科学など、地球環境学に関連した分野をめざす大学院学生を今後とも積極的に受け入れます。

第二は、地球研の研究員として博士課程修了後の若手研究者をプロジェクト研究員として積極的に受け入れ、研究プロジェクトへの参画をうながし、研究活動の推進と研究者育成のための支援を行っています。平成18年4月現在、地球研では58名のプロジェクト研究員を受け入れています。



地球研「水の中庭」から「落ち葉の中庭」

社会連携

1. 『地球研ニュース』 (Humanity & Nature Newsletter)

地球研とは何か、どんな活動をしているのかなど最新の情報を、研究者や社会に広く発信するもので、平成18年4月に創刊しました（A4判、12頁、3,000部発行）。年6回の発行予定です。



地球研ニュース 1



地球研ニュース 2

3. 地球研市民セミナー

地球研の研究活動などをわかりやすく紹介するため、地球研スタッフによる市民を対象にした公開講演会を平成16年11月から開催し、平成18年4月までに12回実施しています。平成18年度はさらに7回開催の予定です。

大学院教育

地球研の教員は、人間文化研究機構に属する他の4機関と異なり、総合研究大学院大学の教員とはなっていません。しかし、大学院教育への協力の一環として、さらには地球環境学の若手研究者を養成する意味からも、2つの事業を推進しています。



国立民族学博物館全景

概要

国立民族学博物館(民博)は、民族学・文化人類学に関する調査・研究を行うとともに、その成果にもとづいて、民族資料の収集・公開などの活動を行い、これらを通して、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を人びとに提供し、諸民族についての認識と理解を深めることを目的としています。なお、民博は大学共同利用機関として、国立学校設置法の一部を改正する法律(昭和49年法律第81号)により設置されました。

研究

研究活動 機関研究

機関研究は、個人で行うのが難しい規模の大きな課題、周辺諸分野にまたがる学際的な課題、広く人文社会科学の共通する重要な基礎的課題について、民博の組織をあげて取り組む研究です。ここでは、民族学・文化人類学の研究センターとしての民博の特性を生かし、学術的、社会的要請にこたえるために、分野横断的で先進的な課題を取り上げます。

現在、「社会と文化の多元性」「人類学的歴史認識」「文化人類学の社会的活用」「新しい人類学の創造」の4つの領

域が設定されており、各領域の下に具体的な課題を掲げた研究プロジェクトが組織され、研究を行っています。これらの研究プロジェクトは、民族学・文化人類学および関係諸分野の発展に寄与し、さらには人文社会科学の再編や新しい分野の創出に貢献することが期待されます。

共同研究

民族学・文化人類学および関連分野の特定のテーマについて、館内外の専門家が共同で行う研究です。その課題は、公募も含めた館内外からの応募を、館外の委員も加わる共同利用委員会が審査して決定されます。なお、平成16年度から、共同研究は「文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究」「本館の所蔵する資料に関する研究」「本館の機関研究に関連する研究」の3つのカテゴリーに分けられています。

平成17年度実施の課題数34件のうち、客員教員を代表者とするもの、ならびに公募によるもの(館外の研究者を代表者とする)は、それぞれ8件です。

共同研究員の総数(館外)は、国立大学195名、公立大学23名、私立大学161名、民間など72名です。

各個研究

各個研究とは、研究者個人の自由な発想にもとづいて企画、立案し、実施する研究であり、人文社会科学の研究機関である民博の研究活動の重要な柱です。

研究組織

民族社会研究部

世界の諸民族の社会に関し、民族動態、人類環境、社会システムについての調査研究を行います。

民族文化研究部

世界の諸民族の文化に関し、認知表象、文化構造、民族技術・芸術についての調査研究を行います。

先端人類科学研究部

グローバル現象の調査・研究や理論研究を通して、先端的人類学に関する研究を行います。

研究戦略センター

研究戦略センターは、民族学・文化人類学とその周辺諸分野の最新の研究動向を踏まえ、機関研究をはじめとする本館の研究活動の戦略を策定するために、平成16年度に新たに設置されました。

文化資源研究センター

文化資源研究センターは、人間文化についての理解を深めるために、研究者による共同利用や広く社会の人びとによる利用が可能となるように、文化資源の体系的な管理と情報化、およびその共同利用や社会還元に向けて基礎研究や開発研究を行うとともに、実際に事業を推進する際の企画・調整を行うことを目的として、平成16年度に設置されました。

研究成果の公開

出版活動

民博の専任教員、客員教員など館内および館外の研究者が、各個研究、共同研究、国際シンポジウム、科学研究費補助金などによる研究の成果を広く社会に公開するため、『国立民族学博物館研究報告』『Senri Ethnological Studies (SES)』『Senri Ethnological Reports (SER)』『国立民族学博物館研究年報』を出版しています。館外での商業出版も奨励しており、平成17年度は、海外の出版社からの1点を含め6点の刊行物が出版されています。

研究成果公開プログラム

研究成果公開プログラムは、研究成果をより効果的に公開し、社会還元を円滑に図る目的で実施しています。平成17年度は、国際シンポジウム「東南アジア大陸部の書承文化」(共催:フランス極東学院、助成:国際交流基金)、研究フォーラム「歴史と記憶——ラテンアメリカの先住民と暴力の歴史化」(共催:日本ラテンアメリカ学会、地域研コンソシアム、神戸大学国際文化学部)など、あわせて12の研究集会を実施しました。

共同利用

民博では、民族学・文化人類学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に資するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元を行っています。

1. 諸資料の収集・整理・研究・情報提供

民博の所蔵する諸資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育における活用、他の博物館への貸し付けなどを

通して、共同利用に供しています。

標本資料:256,436点、映像音響資料:69,325点、文献図書資料:図書587,115冊/雑誌15,586種、HRAF(Human Relations Area Files):地域(民族集団)ファイル385ファイル/原典(テキスト)7,141冊

なお、本年度から「民族学資料利用窓口」が設けられています。URL <http://www.minpaku.ac.jp/kyodomado.html>

2. データベース

データベースシステムおよび画像情報システムで作成された各種データベースを有機的に結合し検索できる、マルチアーカイブズ検索システム(MARS)により、民族学・文化人類学に関わる膨大な情報が館内外の研究者に広く利用されています。民博が所蔵する各種コレクションに関する情報や、西北ネパール学術探検隊が撮影した資料と同隊が収集した標本資料の情報「ネパール写真データベース」をはじめ、服装関連雑誌記事、服装関連日本語図書の索引、衣服標本画像などがインターネットを介して一般に公開されています。

また、民博が所蔵する文献図書資料(図書・雑誌など)の総合目録データベースをオンライン(OPAC)により利用者端末で検索できます。

3. 展示

地域展示

世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域に分けて展示しています。



地域展示



地域展示

通文化展示

特定の地域単位でなく、特定のジャンルを取りあげて広く世界の民族文化を通覧する展示で、現在は音楽と言語についての展示を常設しています。

企画展示

本館展示場において、現代的な問題や最先端の研究課題など個々のテーマについて、期間を限って開催されます。なお、平成18年度は、「さわる文字、さわる世界——触文化が創り出すユニバーサル・ミュージアム」を開催しています。

特別展示

特別展示は、特別展示館において特定のテーマについて掘り下げた最新の研究成果を総合的・体系的に紹介する大規模な展示で、期間を限って、年に数回開催されます。

- ・特別展「みんぱくキッズワールド——こどもとおとなをつなぐもの」

平成18年3月16日～5月30日

- ・特別展「更紗今昔物語——ジャワから世界へ」

平成18年9月7日～12月5日

グローバル化の急速な進展は、人類の衣生活と深く関わってきたテキスタイルの分野においても顕著に見られます。今回の展示は、インドネシアのジャワ更紗の成立と歴史的な推移に見られるダイナミックなグローバル化現象の実態を、そのデザインと技術の側面から紹介するものです。展示は、①伝統的なジャワ更紗、②世界に展開したジャワ更紗のデザインを模倣したプリント更紗、③世界に展開したジャワ更

紗の口ウ防染技術の3部で構成し、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、中米など、世界各地で収集した多様な資料を展示します。

その他、他の博物館、大学等との協力による巡回展示、共催展示を実施しています。



特別展示

社会連携

1. 学術講演会

先端的な研究活動を取り上げ、その成果を社会に積極的に還元するとともに、一般市民に民族学・文化人類学に対する理解を深めてもらうことを目的として学術講演会を実施しています。

平成17年度は、公開講演会「家族のデザイン——韓国・中国・日本、それぞれの選択」を平成17年10月に東京で、公開講演会「世界の伝統芸能・最前線——映像は文化遺産を伝えられるのか」を平成18年3月に大阪で実施しました。



学術講演会

2. 国際連携

(JICA 集団研修「博物館学集中コース」)

このコースは、世界各地の博物館専門家を対象として、博物館の運営に必要な、収集・整理・研究・展示・保存に関する実践的技術の研修を実施し、博物館を通じて各国の文化の振興に貢献できる人材を育成するものです。民博が国際協力機構（JICA）から全面的委託を受け、毎年、10か国前後の国から計10名の研修生を受け入れ、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で4か月にわたる研修を運営しています。



博物館学集中コース

3. 広報出版

『民博通信』『MINPAKU Anthoropology Newsletter』『月刊みんぱく』『国立民族学博物館展示ガイド（日本語、英語）』、案内リーフレット（日本語、英語、小中学生用、点字）、特別展の展示図録等を通して、館の研究や展示諸活動を広報しています。

4. みんぱくゼミナール

毎月第3土曜日に、一般市民および学生を対象にして、研究部の教員などが最新の研究成果をわかりやすく講演しています。特別展開催期間中には、関連したテーマを重点的に取りあげるなど、いつも新鮮な講演内容となるよう努めています。

5. みんぱく映画会

上映される機会の少ない民族学・文化人類学に関する貴重な映像資料などを、教員の解説を交えて上映しています。

6. 研究公演

世界の諸民族の民族芸能などの公演を実施することによって、参加者に民族学・文化人類学に関する理解を深めてもらうことを目的としています。

7. 学習キット「みんぱく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として「みんぱく」の貸し出しを実施しています。「みんぱく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、4月に新たに“アラビアンナイトの世界パック”が仲間入りし、平成18年4月現在で9種類16パターンを用意しています。

8. 「みんぱく e-news」

その時々最新の研究情報や、本館で行われる各種事業のお知らせを、月1回程度電子メールで配信しています。

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp>

9. その他

近隣の中学校からの要請に応じ、中学生に「職場体験学習」の機会を提供し、実際に勤労を体験することによる人材育成への協力のほか、「先生のためのガイダンス」を行い、授業への利用促進を図っています。また、「子ども見学デー」の実施や「全国生涯学習フェスティバル」への参加を行っています。

大学院教育

民博には、総合研究大学院大学の文化科学研究科（地域文化学専攻、比較文化学専攻）が設置されています。両専攻の教育研究目的は、独創的な民族学・文化人類学の研究、長期のフィールドワークで得られた資料にもとづく学位論文の作成、および広い視野を持った人間性豊かな研究者の養成です。

また、特別共同利用研究員の制度を通して、他大学の大学院生を受け入れ、指導することで、その大学院教育に協力しています。

資料

委員会一覧

経営協議会

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
朝岡 康二	理事
大崎 仁	理事
五味 文彦	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
伊井 春樹	国文学研究資料館長
片倉 もとこ	国際日本文化研究センター所長
日高 敏隆	総合地球環境学研究所長
松園 万亀雄	国立民族学博物館長
岩男 壽美子	慶應義塾大学・名誉教授
大塚 和夫	東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所長
大原 謙一郎	大原美術館・理事長
金田 章裕	京都大学大学院・教授
高村 直助	横浜市歴史博物館・館長
永井 多恵子	日本放送協会・副会長
平田 保雄	日本経済新聞社・専務取締役
福原 義春	資生堂・名誉会長
藤井 宏昭	国際交流基金・顧問
古澤 巖	鳥取環境大学・学長

教育研究評議会

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
大崎 仁	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
伊井 春樹	国文学研究資料館長
片倉 もとこ	国際日本文化研究センター所長
日高 敏隆	総合地球環境学研究所長
松園 万亀雄	国立民族学博物館長
小野 正敏	国立歴史民俗博物館・教授
谷川 恵一	国文学研究資料館・複合領域研究系研究主幹
園田 英弘	国際日本文化研究センター・教授
中尾 正義	総合地球環境学研究所・プログラム主幹
佐々木 史郎	国立民族学博物館・研究戦略センター長
青柳 正規	国立西洋美術館・館長
大塚 柳太郎	国立環境研究所・理事長
佐藤 宗諱	長浜バイオ大学・教授
須藤 健一	神戸大学附属図書館・館長

立本 成文	中部大学・教授
平野 由起子	お茶の水女子大学大学院・教授
鷲田 清一	大阪大学理事・副学長

人間文化研究総合推進検討委員会

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
朝岡 康二	理事
大崎 仁	理事
五味 文彦	理事
安田 常雄	国立歴史民俗博物館・教授
谷川 恵一	国文学研究資料館・複合領域研究系研究主幹
猪木 武徳	国際日本文化研究センター・教授
小松 和彦	国際日本文化研究センター・教授
秋道 智彌	総合地球環境学研究所・プログラム主幹
田村 克己	国立民族学博物館・副館長
義江 彰夫	東京大学大学院・教授
佐倉 統	東京大学大学院・助教授
波平 恵美子	元お茶の水女子大学・教授 (18.10.19～ お茶の水女子大学・名誉教授)
金田 章裕	京都大学大学院・教授
五條堀 孝	国立遺伝学研究所・教授
中島 尚正	産業技術総合研究所・理事
佐野 みどり	学習院大学・教授
立本 成文	中部大学・教授
川北 稔	京都産業大学・教授

評価委員会

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
朝岡 康二	理事
大崎 仁	理事
秋道 智彌	総合地球環境学研究所・プログラム主幹
谷川 恵一	国文学研究資料館・複合領域研究系研究主幹
黒田 英雄	事務局長
広瀬 和雄	国立歴史民俗博物館・教授
武井 協三	国文学研究資料館・文学形成研究系研究主幹
井上 章一	国際日本文化研究センター・教授
佐藤 洋一郎	総合地球環境学研究所・プログラム主幹
佐々木 史郎	国立民族学博物館・研究戦略センター長

岩男 壽美子	慶應義塾大学・名誉教授
大塚 和夫	東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所長
川北 稔	京都産業大学・教授
金田 章裕	京都大学大学院・教授
外園 豊基	早稲田大学・教授
山本 清	国立大学財務・経営センター・教授

機構会議

◎石井 米雄	機構長
長野 泰彦	理事
朝岡 康二	理事
大崎 仁	理事
五味 文彦	理事
平川 南	国立歴史民俗博物館長
伊井 春樹	国文学研究資料館長
片倉 もとこ	国際日本文化研究センター所長
日高 敏隆	総合地球環境学研究所長
松園 万亀雄	国立民族学博物館長

企画連携室会議

◎長野 泰彦	理事
安田 常雄	国立歴史民俗博物館・教授
鈴木 淳	国文学研究資料館・副館長
合庭 惇	国際日本文化研究センター・情報管理施設長
秋道 智彌	総合地球環境学研究所・プログラム主幹
田村 克己	国立民族学博物館・副館長

連携研究委員会

◎長野 泰彦	理事
安田 常雄	国立歴史民俗博物館・教授
今村 峯雄	国立歴史民俗博物館・教授
陳 捷	国文学研究資料館・助教授
今谷 明	国際日本文化研究センター・教授
早坂 忠裕	総合地球環境学研究所・教授
杉本 良男	国立民族学博物館・教授
大塚 柳太郎	国立環境研究所・理事長
村井 章介	東京大学大学院・教授
ツバタナ・クリステワ	国際基督教大学・教授

伊藤 亞人	琉球大学・教授
李 成市	早稲田大学・教授

研究資源共有化検討委員会

朝岡 康二	理事
安達 文夫	国立歴史民俗博物館・教授
安永 尚志	国文学研究資料館・教授
山田 奨治	国際日本文化研究センター・助教授
関野 樹	総合地球環境学研究所・助教授
小林 繁樹	国立民族学博物館・情報管理施設長
合庭 惇	国際日本文化研究センター・情報管理施設長
◎及川 昭文	総合研究大学院大学附属図書館・館長
柴山 守	京都大学東南アジア研究所・教授
東倉 洋一	国立情報学研究所・副所長
橋田 浩一	産業技術総合研究所・副研究部門長
八村 広三郎	立命館大学・教授
洪 政国	日本アイ・ピー・エム 開発製造 ソフトウェア開発研究所 オートノミック・コンピューティング事業推進担当部長
牟田 昌平	国立公文書館・公文書専門官

地域研究推進委員会

◎石井 米雄	機構長
大崎 仁	理事
小野 元之	日本学術振興会・理事長
片倉 もとこ	国際日本文化研究センター所長
金子 元久	東京大学大学院・教授
金田 章裕	京都大学大学院・教授
佐藤 次高	早稲田大学・教授
斯波 義信	東洋文庫・理事長
田村 和子	共同通信・客員論説委員
中根 千枝	東京大学大学院・名誉教授
濱下 武志	龍谷大学・教授
平野 健一郎	早稲田大学・教授
山田 辰雄	放送大学・教授
渡邊 幸治	日本国際交流センター・シニアフェロー

◎＝議長・委員長

予算・決算

【平成18年度予算】

収入	14,856
運営費交付金	12,060
施設整備費補助金	2,608
自己収入	188
支出	14,856
教育研究経費	9,156
一般管理費	3,092
施設整備費	2,608

【平成17年度予算】

収入	14,281
運営費交付金	12,276
施設整備費補助金	1,845
自己収入	160
支出	14,281
教育研究経費	9,341
一般管理費	3,095
施設整備費	1,845

【平成17年度決算】

収入	14,380
運営費交付金	12,276
施設整備費補助金	1,847
自己収入	257
支出	14,024
教育研究経費	9,378
一般管理費	2,799
施設整備費	1,847

(単位:百万円)

職員数

(平成18年5月1日現在)

館長・所長	5	研究教育職員	203	事務・技術職員	201
-------	---	--------	-----	---------	-----

機関名	職員(常勤)		外国人研究員	客員教員(国内)
	種別	現員		
機構本部	事務・技術職員	22		
	小計	22		1
国立歴史民俗博物館	館長	1		
	研究教育職員	50		
	事務・技術職員	41		
	小計	92		8
国文学研究資料館	館長	1		
	研究教育職員	35		
	事務・技術職員	34		
	小計	70	1	5
国際日本文化研究センター	所長	1		
	研究教育職員	29		
	事務・技術職員	36		
	小計	66	13	20
総合地球環境学研究所	所長	1		
	研究教育職員	34		
	事務・技術職員	24		
	小計	59	6	6
国立民族学博物館	館長	1		
	研究教育職員	55		
	事務・技術職員	44		
	小計	100	2	6
計	館長・所長	5		
	研究教育職員	203		
	事務・技術職員	201		
	計	409	22	46

(単位:人)

【非常勤研究員等】

(平成18年5月1日現在)

	国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
研究機関研究員	5	3	3	3	5	19
リサーチ・アシスタント	0	13	0	12	13	38

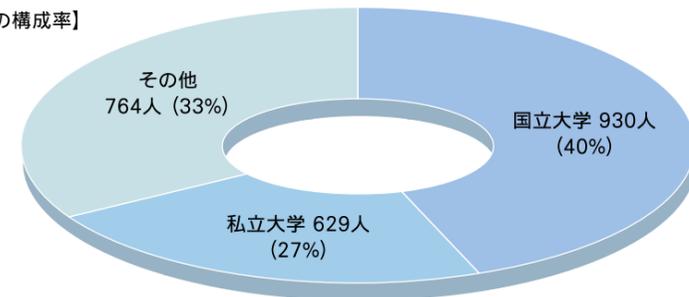
(単位:人)

共同研究の件数および共同研究者数 在籍 (平成17年度)

	共同研究件数	総数	共同研究員の所属機関の内訳						
			国立大学	公立大学	私立大学	公的機関	民間機関	外国機関	その他
国立歴史民俗博物館	25	246	70	9	82	9	0	6	70
国文学研究資料館	17	91	44	7	33	1	0	0	6
国際日本文化研究センター	16	410	112	23	147	22	17	0	89
総合地球環境学研究所	26	892	406	45	110	83	22	196	30
国立民族学博物館	34	684	298	41	257	28	32	0	28
計	118	2,323	930	125	629	143	71	202	223

(単位:件、人)

【共同研究者の構成率】



研究者の受け入れ・派遣 (平成17年度)

種別	国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
外来研究員	11	7	51	38	45	152
日本学術振興会特別研究員	2	5	0	5	7	19
日本学術振興会外国人特別研究員	0	0	2	1	3	6
外国人研究員招へい	6	3	15	11	8	43
研究者の海外派遣	37	31	27	41	60	196

(単位:人)

外部資金の受け入れ

【科学研究費補助金(申請件数)】

機関名	平成18年度	平成17年度	平成16年度
国立歴史民俗博物館	52 (36)	42 (21)	44 (23)
国文学研究資料館	50 (29)	49 (27)	52 (25)
国際日本文化研究センター	19 (10)	26 (19)	24 (17)
総合地球環境学研究所	50 (30)	56 (39)	34 (24)
国立民族学博物館	41 (26)	43 (27)	36 (17)
計	212 (131)	216 (133)	190 (106)

(単位:件 カッコ内は新規分で内数)

【科学研究費補助金(採択)】

機関名	採択件数・金額	平成17年度	平成16年度	平成15年度
国立歴史民俗博物館	件数	32(10)	30(9)	31(16)
	金額	154,500	171,500	99,500
国文学研究資料館	件数	36(14)	40(14)	39(21)
	金額	141,000	172,900	195,100
国際日本文化研究センター	件数	15(8)	13(7)	16(9)
	金額	107,000	98,300	112,100
総合地球環境学研究所	件数	33(11)	24(13)	17(4)
	金額	96,430	65,100	50,300
国立民族学博物館	件数	53(13)	35(10)	37(15)
	金額	131,100	148,500	136,900
計	件数	169(56)	142(53)	140(65)
	金額	630,030	656,300	593,900

(単位:件、千円 カッコ内は新規分で内数)

【受託研究】

機関名	受け入れ	平成17年度	平成16年度	平成15年度
国立歴史民俗博物館	件数	1	0	2
	金額	637	0	3,025
国文学研究資料館	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国際日本文化研究センター	件数	2	2	0
	金額	30,495	17,446	0
総合地球環境学研究所	件数	11	10	6
	金額	85,018	89,747	54,080
国立民族学博物館	件数	6	6	4
	金額	22,184	23,985	6,623
計	件数	20	18	12
	金額	138,334	131,178	63,728

(単位:件、千円)

※間接経費含まず

【民間との共同研究】

機関名	受け入れ	平成17年度	平成16年度	平成15年度
国立歴史民俗博物館	件数	0	0	1
	金額	0	0	420
国文学研究資料館	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国際日本文化研究センター	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
総合地球環境学研究所	件数	0	1	1
	金額	0	500	400
国立民族学博物館	件数	0	0	1
	金額	0	0	2,235
計	件数	0	1	3
	金額	0	500	3,055

(単位:件、千円)

【奨学寄附金】

機関名	受け入れ	平成17年度	平成16年度	平成15年度
国立歴史民俗博物館	件数	4	3	15
	金額	5,400	6,600	13,430
国文学研究資料館	件数	1	2	2
	金額	200	1,000	1,000
国際日本文化研究センター	件数	5	6	8
	金額	6,200	4,300	9,300
総合地球環境学研究所	件数	6	6	3
	金額	6,598	6,225	2,500
国立民族学博物館	件数	1	3	8
	金額	200	6,067	8,800
計	件数	17	20	36
	金額	18,598	24,192	35,030

(単位:件、千円)

【その他の外部資金】

機関名	受け入れ	平成17年度	平成16年度	平成15年度
国立歴史民俗博物館	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国文学研究資料館	件数	3	3	1
	金額	2,635	3,272	1,825
国際日本文化研究センター	件数	1	1	1
	金額	5,018	20,137	3,432
総合地球環境学研究所	件数	0	0	0
	金額	0	0	0
国立民族学博物館	件数	1	0	0
	金額	7,000	0	0
計	件数	5	4	2
	金額	14,653	23,409	5,257

(単位:件、千円)

データベース一覧(平成17年度作成分)

【国立歴史民俗博物館】

分類	名称
データベースれきはく1	館蔵錦絵
データベースれきはく1	宮座研究論文目録
データベースれきはく1	地域蘭学者門人帳人名
データベースれきはく1	江戸商人・職人

【国文学研究資料館】

分類	名称
書誌・目録	古筆切所収情報データベース
本文データベース	吾妻鏡
本文データベース	絵入り源氏
画像データベース	歴史人物画像データベース
画像データベース	実業史絵画データベース

【国際日本文化研究センター】

分類	名称
日文研所蔵 稀本・資料データベース	ちりめん本DB
日文研所蔵 稀本・資料データベース	近世風俗図絵DB
日文研所蔵 稀本・資料データベース	絵巻物DB
日文研所蔵 稀本・資料データベース	西洋医学史古典文献(野間文庫)
機関連携データベース	米国議会図書館所蔵浮世絵DB
機関連携データベース	奈良絵本

【国立民族学博物館】

分類	名称
標本資料	アクセサリ・身装文化デジタルアーカイブ
写真資料	ネパール写真データベース

大学院教育

●総合研究大学院大学

【学位授与状況】

(平成18年4月1日現在)

文化科学研究科	文学	35
	学術	37

(単位:人)

【在学生数】

(平成18年5月1日現在)

後期3年博士課程	研究科	専攻	入学定員	3年次(1年次)		4年次(2年次)		5年次(3年次)		計				
				女子	留学生	女子	留学生	女子	留学生	女子	留学生			
				文化科学	地域文化学	3	3	2	0	3	1	0	11	8
文化科学	比較文化学	3	2	1	0	3	3	0	21	15	3	26	19	3
文化科学	国際日本研究	3	2	2	1	4	1	2	10	6	4	16	9	7
文化科学	日本歴史研究	3	9	2	0	5	2	0	15	3	0	29	7	0
文化科学	日本文学研究	3	2	0	1	5	4	0	5	1	0	12	5	1
文化科学	計	15	18	7	2	20	11	2	62	33	8	100	51	12

(単位:人)

●特別共同利用研究員

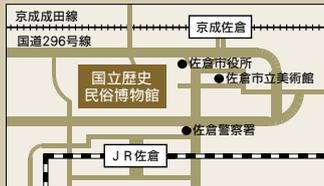
(平成18年5月1日現在)

国立歴史民俗博物館	国文学研究資料館	国際日本文化研究センター	総合地球環境学研究所	国立民族学博物館	計
4	11	7	3	11	36

(単位:人)

国立歴史民俗博物館

〒285-8502
千葉県佐倉市城内町117
TEL:043-486-0123(代表)
<http://www.rekihaku.ac.jp/>



国文学研究資料館

〒142-8585
東京都品川区豊町1-16-10
TEL:03-3785-7131(代表)
<http://www.nijl.ac.jp/>



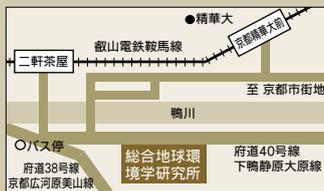
国際日本文化研究センター

〒610-1192
京都市西京区御陵大枝山町3-2
TEL:075-335-2222(代表)
<http://www.nichibun.ac.jp/>



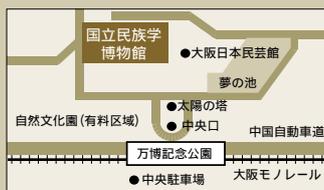
総合地球環境学研究所

〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457-4
TEL:075-707-2100(代表)
<http://www.chikyu.ac.jp/>



国立民族学博物館

〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1(万博記念公園内)
TEL:06-6876-2151(代表)
<http://www.minpaku.ac.jp/>



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13 秀和神谷町ビル2階
TEL:03-6402-9200(代表)
<http://www.nihu.jp/>

(最寄り駅)
地下鉄日比谷線神谷町駅(出口4b徒歩約2分)
地下鉄三田線御成門駅(出口A5徒歩約10分)

